

## イ・ラガリゴ叙事詩への道

伊 藤 眞

### I はじめに

本稿の目的は、インドネシア、南スラウェシのブギスの間に伝わる「イ・ラガリゴ」(I La Galigo) 叙事詩が西欧に知られるようになった19世紀初頭から2011年にユネスコから世界記憶遺産として認定されるに至るまでのおよその道程を跡づけることである。

南スラウェシでは、イ・ラガリゴ叙事詩のおもな登場人物であるサウェリ・ガディンやラガリゴの名は、現在でも街路や建物の名称にも使用され、一般によく知られている。けれども、イ・ラガリゴ叙事詩の内容、エピソードについての人々の知識は、近年ではラガリゴ叙事詩に関する読み物が出版されていることから若干向上しているとはいえ、一般的にはきわめて乏しい。たとえば筆者が長期滞在した1980年代ブギスの村落部では、イ・ラガリゴ叙事詩について知る者はほとんどなく、唯一出会った「ラガリゴ」稿本をもつという婦人が筆者に見せてくれたのは、ノートに手書きで書かれた、イ・ラガリゴ叙事詩とは異なる「黒猫の物語」であった<sup>1)</sup>。この物語はイ・ラガリゴ叙事詩中には見出されないが、人々はこの物語をも一般的に「イ・ラガリゴ」と呼んでおり、農家ではこの一節を「マッドジャビネ」と呼ばれる収穫儀礼で朗読したという。それと同様に、イ・ラガリゴ叙事詩の一節も、嘗て結婚式などで朗唱される機会があったとも言われるが、実際にそうした経験を持つ人は年長者の間でも皆無なのである。

このようにその主要登場人物の名を除いて、人々の記憶からほとんど忘れられかけていたイ・ラガリゴ叙事詩は<sup>2)</sup>、どのような経緯を経て外部世界に知られるようになり、またついには世界記憶遺産として認知されるに至ったのか、また世界記憶遺産が人々の集合的記憶を喚起するものであるならば、イ・ラガリゴ叙事詩は、とりわけ若い世代になんらかのインパクトを与える可能性をもつのか、このような疑問が筆者の出発点である。ここではイ・ラガリゴ叙事詩を文学作品としてというよりは、文化的現象として捉えることで、この叙事詩とそれをめぐる人々の関わりについての足跡に焦点を当てるにとどめていることをお断りしておく。

## II イ・ラガリゴ叙事詩とは

イ・ラガリゴ叙事詩が「叙事詩」と呼ばれるのは、それが基本的に5音節（場合により4音節）の韻律から構成されるためである。プギス人はマカッサル人と同様にアクサラ・ロンタラ（ロンタラ文字）と呼ばれる、南インド起源とされる23種の字母からなる音声文字をもつ。それによって書き著されたものが「スレ」（sure'）と「ロンタラ」（lonrtara'）であり、前者は韻律を伴う詩文を、後者は王国の年代記や系譜など歴史的記述を含む書き物の総称を指す<sup>3)</sup>。イ・ラガリゴ叙事詩が現地においてしばしば「スレ・ガリゴ」と呼ばれるのは、そのためである。なお、南スラウエシの記述は、一般に、著者名、執筆日付が付されないことが一つの特徴であることも付け加えておく。

イ・ラガリゴ叙事詩は、天上界からプギス族の「故郷」といわれるルウの地（南スラウエシ州北部）に降臨し、最初の王国を建設するバタラ・グルとその子孫ら6世代の神話的な事蹟、英雄譚を主な内容とする。ハモニックはイ・ラガリゴ叙事詩の構成を、(1) 神話的記述、(2) ロマネスク的ないしは物語記述、(3) 英雄叙事詩記述に分類している。神話的記述とは、人間界の起源でもあるルウ王国の誕生であり、物語記述とはサウエリ・ガディンとウエ・テンリアベンとの許されぬ恋愛、そして英雄叙事詩的記述とはサウエリ・ガディンやラガリゴの冒険と戦闘であると指摘している。つぎにその大要をペルラスに倣い、5つの部分に分けて紹介しよう<sup>4)</sup>。

### 【イ・ラガリゴ叙事詩の大要】

イ・ラガリゴ叙事詩によれば、世界は原初、神々や超自然的存在のいる天上界ボティ・ランギBoti'langi'もしくはランギlangiと地下界ベレティウィPeretiwiとに分かれ、中界タナTanaもしくはKawa'は「空」であった。そのため神々は集い、天界の創造主パトエPatotoeの長子を初代の王として中界に送ることを決定する。それがトゲランギToge'langi' またの名はバタラ・グルBatara Guruであり、彼は竹筒の空洞に入って中界に降り立つ。バタラ・グルは、父親パトエと同様、地下界からイトコのウエ・ニイリティモWe Nyili'timoを娶り、バタラ・ラットウBatara Lattuを得る。バタラ・ラットウはトンボティックTompotikka（「日出る国」の意）からイトコであるウエ・オブセンゲンWe Opusengengを娶り、両者から生まれるのが叙事詩のなかで最も中心的な人物となるサウエリ・ガディンSawerigadingと双子の妹ウエ・テンリアベンWe Tenriabengである。バタラ・グルは天上界に戻り、バタラ・ラットウがルウを治めることになる。

サウエリ・ガディンは成長すると祖父のいる天上界に昇り、そこでイトコ達の大半と結婚してしまう。それから彼はスラウエシの周辺、マルク、スンバワ、名のわからぬ国、現実なのか夢の中なのかわからない国を訪れ、さらには巨大な幹が天上界まで延び、根が深く地下界までとどく宇宙樹pao jenkiのある島をも訪れる。大洋の真ん中で海と海とが交わるところ、また死者の国では死んだばかりの若い女We Pinarakiの求婚

を断り、再び生者の国に導かれるとそこでウェレ・リ・リノ Welle ri lino と婚約する。

サウエリ・ガディンは再びルウに戻るが、ここから物語の新しい段階に入り、これまでの神話的、あるいは奇譚的要素は後退し、ロマネスクの要素が優越するようになる。

サウエリ・ガディンとウェ・テンリアベンは幼い頃より離され育てられていた。ある時、サウエリ・ガディンはウェ・テンリアベンの美しい容姿を見るなり恋し、結婚しようと決意する。しかし、彼の取り巻きたちはそれを禁忌だとして反対し、サウエリ・ガディンが求婚しようとする相手がまさしく双子の妹であることを告げ、ウェ・テンリアベンも同意しない。最後の別れ際に、ウェ・テンリアベンはチナ国に自分のイトコの一人がいること、ウェ・チュダイ We Cudai といい、彼女と瓜二つであることを告げる。サウエリ・ガディンはウェ・チュダイと妹が瓜二つであることを確かめるために、妹の髪の毛、腕輪、そして指輪を用意する。彼はウェレンレンゲ Werelenge という巨木を切り倒し、その幹をくりぬいて作った船に乗り込み、再び航海に乗り出す。

サウエリ・ガディンは航海の途中でさまざまな敵と遭遇し、海上での幾多の戦闘を経た後に、チナ国に到着する。彼は港での長逗留を余儀なくされるが、商人に扮するなどの策略を用いてウェ・チュダイの屋敷に近づく。ようやく未知なるイトコを見、ウェ・チュダイが、かつて妹が述べた容姿の持ち主であることを確信する。やがて結婚の承諾が得られ、いったん結納品が運ばれる段になるが、ウェ・チュダイは婚姻の意思を翻し、父親であるチナ国王ラ・サトゥンプギ La Sattumpugi も婚姻締結を破棄したため、サウエリ・ガディンに率いられたルウ国の船団とチナ国とは戦闘になる。チナ国の敗北が濃厚になるとウェ・チュダイは死んだ者達を生き返らせることができるならば、という無理な条件をつけて婚姻を受諾する。しかし、サウエリ・ガディンは天上界の正当な血統に由来する霊力を以てそれを実現する。両者は結婚するが、ウェ・チュダイはサウエリ・ガディンの姿を見たくないと彼を日中に迎い入れることを拒み続け、顔の見えない夜だけ受け入れる。やがてウェ・チュダイはラガリゴ La Galigo を出産するが産婆に生まれたばかりの子を河に流して死なせるように命ずる。これを知ったサウエリ・ガディンはラガリゴを救い、マリオの地に連れて行き、ウェ・チンバウ We Cimpau に育てさせる。ラガリゴは成長して闘鶏をしているところをウェ・チュダイに目撃されることとなり、しばらくしてはじめて両者が親子であることが知られる。その後、ラガリゴは父親とともに母の屋敷で暮らすことになる。やがてウェ・チュダイは娘ウェ・テンリディオ We Tenridio を出産するが、天上界の精霊に憑かれやすいことを理由に、後にビッス bisu 戦に就かせる。

次の部分でも、サウエリ・ガディンとウェ・チュダイは登場するものの、彼らは後景に退き、むしろラガリゴが英雄として描かれるようになる。彼はブギスの貴族男性の祖型であり、好戦的で軍事遠征をししばしば行い、闘鶏を好み、かつ好色な人物である。そこでは、サウエリ・ガディンの親族、姻族に属するさまざまな人物の冒険譚が描

かれる。

最後の部分は、再び神話的な要素が優越する。ラガリゴの息子ラテンリタッタ La Tenritatta の結婚の後、一族がルウの地に参集する。その後、サウエリ・ガディンとウェ・チュダイは、ウェレンレンゲに乗船し、ルウからチナに向かうが、途中大波に飲み込まれる<sup>5)</sup>。サウエリ・ガディンは、地下界の主グルリセッレン Guru ri Selleng に代わり地下界を治めることになる。一方、サウエリ・ガディンと双生の妹ウェ・テンリアベンとその夫レンパン・リランギ Rempang ri Langi は天上界を統治するようになる。これを期に、聖なる出自を有するすべて王子王女はこの地上から姿を消す。唯一の例外は、サウエリ・ガディンの娘とウェ・テンリアベンの息子であり、この二人は結婚してルウを治めるようになる。この二人から一人の王子が生まれた後は、地上と天上界、地下界との交流は閉じられる。以来、人間は人間界だけで生きていくことになるのである。

### 【イ・ラガリゴ叙事詩をめぐる諸研究】

まずイ・ラガリゴ叙事詩の稿本のカatalogを作成したオランダの書誌学者ケルンによれば、イ・ラガリゴ叙事詩は単一の作品ではなく、数多くの詩篇群からなり、フォリオ紙およそ6000頁の分量に達すると述べている。各稿本には膨大な数の登場人物がいる。たとえば、バタラ・グルが中界に降下する最初の稿本では75人、サウエリ・ガディンが双生の妹ウェ・テンリアベンに恋をするエピソードでは262人もその登場人物名がリストに付されている。一方、ケルンはイ・ラガリゴ叙事詩では天上界、中界、地下界が区別されるものの、そこで描かれる人々の暮らしには変わりなく、ただ「神聖さ」の有無がそれぞれを区別するだけだと指摘する。またイ・ラガリゴ叙事詩で描き出される王国の様子にも共通性が認められる。河口近くに王宮があり、その前方あるいは傍らには「バルガ」と呼ばれる集会場があり、王や貴族たちが話し合ったり、客人を迎える場になる。またその近くにあるアッサム樹の下で男達は闘鶏に興じる。女達は宮廷の中からその様子を眺めている、などである。ケルンは、イ・ラガリゴ叙事詩を「神話」というよりは、ブギスのかつての生活を描き出す「前・歴史」なのだと指摘している<sup>6)</sup>。

ケルン以降の諸研究の流れを瞥見すると、まずイ・ラガリゴ叙事詩を歴史的資料として扱うのか否かという観点からの研究がある。叙事詩には、ボネ、ゴワなど後に南スラウェシに勃興する歴史的王国<sup>7)</sup>についての言及はないが、各王国の年代記(ロンタラ)には、王国が興る以前に7世代にわたる空白の時代が続いたとあり、それ以前の時代を「ラガリゴの時代」と位置づけている。そうした記述を論拠に、イ・ラガリゴ叙事詩を過去を映し出す歴史的資料として捉えようとする傾向がとくに現地の研究者の間にはある<sup>8)</sup>。しかし、海外研究者の多くは「歴史的資料として扱うことに疑問を呈している。実際、ルウ王国は過去にゴワやボネなどと並ぶ歴史上の王国としても実在したのだが、歴史上のルウ王国とイ・ラガリゴ叙事詩におけるルウ王国とは断絶した

存在である。イ・ラガリゴ叙事詩には、今日でも同定できない地名や架空の国の記述が混在しており、歴史的資料として扱われることには耐得ない。むしろ、イ・ラガリゴ叙事詩に描かれる一連の儀礼、習俗慣行をブギスにとっての知識の集積体（ハベロックのいう“tribal encyclopedia”）と見なすマックナイト（2003）やコールホフ（1999）の立場がある。一方、人類学的研究としては、イ・ラガリゴ叙事詩に現れる観念構造（たとえば、天上界と地下界とのカミガミの間で行われるイトコ交換婚と三分観的コスモロジー、宗教的職能者ビッスの役割）を明らかにしようとするペルラスやハモニックによるアプローチである。

ペルラスは、1967年以降数次に及ぶブギス調査をおこない、ワジョ王国の政治構造、物質文化、イスラーム化以前のボルトガル人資料、民話など多岐にわたる論文を発表しているブギス研究の第一人者である。ペルラス（1983）は、イ・ラガリゴ叙事詩の分析を通じ、天上界、地下界がそれぞれ七層に区別され、中界には大地の中心として宇宙樹の観念が見出されるというイ・ラガリゴ叙事詩を支える世界観を描き出している。彼の『ブギス』<sup>9)</sup>（1996年）はそれ以前の諸論文を集大成したものである。一方、ハモニックは伝統宗教における両性具有的職能者ビッス（Bug. bissu）の儀礼言語や世界観を扱った『神々の言語』（1987）の中で、祭司ビッスが使用する秘密言語としてのビッス語とイ・ラガリゴ叙事詩で使用される言語の比較、叙事詩中におけるビッスの役割について論じている。さらに、歴史考古学的研究を代表するのは、ブルベックとコードウェル【Bulbeck and Caldwell 2000】であり、考古学的発掘資料とイ・ラガリゴ叙事詩、ロンタラの記述、地名などを相互参照することで、叙事詩に描かれる「ルウ王国」像を大胆に描出している。なお、コードウェルにはロンタラ文書を比較分析した博士論文『南スラウェシ1300-1600:ブギスの10のテキスト』（1988）がある。

これら以外に、本論と関わりのある人物とその業績をあげておく。マレー史で著名なレオナルド・アンダヤLeonard Andayaは、南スラウェシにおけるボネ王国の再興を扱った『アルン・パラッカの遺産』（1981）で著名だが、マレーにおけるブギス出身の王が自らの正当性を主張するためにいかにイ・ラガリゴ叙事詩を利用したかについてのユニークな論文がある。オランダの書誌学者ロジェ・ツールToolは、『戦闘の雄鶏ーラブアヤ王の戦記韻文ー』（1990）があるほか、ブギス文学に関する研究もある。彼はレイデン大学にやってくるブギス人研究者にイ・ラガリゴ叙事詩稿本の書誌学的指導を行い、後述するムハマッド・サリムのイ・ラガリゴ叙事詩の翻訳作業において助言を与えた。

以上、おもな研究を列挙した。ここに挙げた以外にも、現地研究者によるイ・ラガリゴ叙事詩に関する研究はあるがここでは省略する。

これまでのイ・ラガリゴ叙事詩研究には、つねに高い壁が立ちはだかっていた。稿本は長大であり、かつ参照することも困難であり、その稿本のインドネシア語翻訳も一部しか進んでいないこと、稿本を直接当たろうとする場合、およそ140年前に編纂



されたマッテスの『ブギス語オランダ語辞典』に頼らざるを得ないこと（その場合ロントラ文字が読めることが必須となる）などである。こうした諸条件がイ・ラガリゴ叙事詩の研究を今ひとつ停滞させているのが現況であるといえよう。

### Ⅲ イ・ラガリゴ叙事詩の発見、稿本収集

#### 【前史】

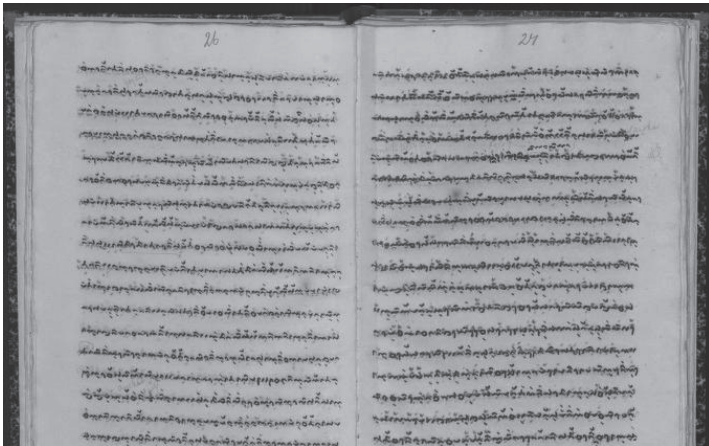
イ・ラガリゴ叙事詩の存在が海外に知られるようになるのは19世紀初頭のことであり、19世紀以前には言及がない。イ・ラガリゴ叙事詩についての最初の言及から今日まですでに200年余りの年月を経過しているわけだが、その研究が軌道に乗り始めたのは比較的近年のことである。19世紀から20世紀前半を通じて、口碑伝承のブギス文字への字訳作業や、すでに字訳されていた稿本<sup>10)</sup>の収集がなされたが、この時期は南スラウェシ諸王国とオランダ軍との戦闘（第一次、第二次ボネ戦争）、植民地化に伴うオランダ軍の進出（1905）、日本軍占領（1942-45）、インドネシア独立後の対オランダ独立闘争（1945-49）、さらにイスラーム国家建設を目指すダルール・イスラーム軍とインドネシア国軍の戦闘（1950-65）<sup>11)</sup>が繰り返された時期と重なり、多くの稿本が消失するなど稿本収集は必ずしも順調に進んだわけではなかった。

イ・ラガリゴ叙事詩について最初に言及したのはスコットランドの詩人・東洋学者 John Leyden ジョン・レイデン（1811年）であるとされる。彼が紹介した詩編の中には、イ・ラガリゴ叙事詩の一つのエピソードが含まれるというが、それが巨大なイ・ラガリゴ叙事詩の一部であるという認識はなかった<sup>12)</sup>。これに続くのは、シンガポールの建設者スタンフォード・ラッフルズである。彼はジャワ総督として在職中に得た資料をもとに大著『ジャワ史』（1817）を著したが、そのアペンディックス中にイ・ラガリゴ叙事詩への言及がある。そこではサウエリガディン（Sawerigading）は、“Sawira Gading”と記されているものの、詩篇の紹介翻訳とともに、イ・ラガリゴ叙事詩の作者はラガリゴであると述べられている<sup>13)</sup>。これら二人の稿本収集は、後にクロウファード（John Crawfurd）の収集を加えて大英図書館に所蔵されることになる。なお、サラワク王国を建設した白人王ジェームズ・ブルックは1854年セレベスを訪れ、そこでイ・ラガリゴ叙事詩を探したが収集出来なかったことが日誌で述べられている。彼の試みは不首尾に終わるが、ブギスの詩について紹介している<sup>14)</sup>。

#### 【B.F. Matthes マッテス（1818-1908）】

マッテスは、オランダ聖書協会（Netherlands Bijbel Genootschap）から派遣された言語学者であり、聖書を現地語訳することを目的として1848年にマカッサルに到着した。マカッサルにおける30年の滞在中、彼は十数巻に及ぶ旧約・新約聖書をブギス語に翻訳出版した。大多数がイスラーム教徒で占められるブギス人への布教でその成果

がどれだけ生かされたかは明らかでない<sup>15)</sup>。マッテスはその傍ら、彼が現地語習得のために始めたマカッサル語、ブギス語稿本の収集、そして辞書編纂は、ブギス・マカッサル研究に大きな足跡を残した。当初彼は稿本収集には苦勞したが<sup>16)</sup>、マカッサルに滞在中、イ・ラガリゴ叙事詩について造詣の深いテネテ国の貴族女性チョリ・プジエを知り、彼女にイ・ラガリゴ叙事詩を書写することを依頼する。その成果はフォリオ紙で2639頁、全12巻に及び、後にオランダ聖書協会からライデン大学図書館に保管を委託された結果、分類番号NBG188として研究者の間で知られるようになる<sup>17)</sup>。数多いイ・ラガリゴ叙事詩稿本の中で、もっとも長いエピソードをもつのがこのNBG188と言われ、後述するように、そのおよそ120年後にインドネシア訳が試みられる事になる<sup>18)</sup>。この稿本ばかりでなく、マッテスのブギス・マカッサル文学、書誌学への貢献は特筆に値する。彼が編纂した『ブギス語オランダ語辞典』(1874年)は今日に至るまでもっとも信頼しうるブギス語辞書である。その付録として出版された『南スラウェシ民族誌』及び『民族学地図』、ブギス語の歴史記述書であるロントラ文書やイ・ラガリゴ叙事詩の一部を所収した『ブギス詞華集』(1864年、1872年第1、2、3巻)など、その貢献は非常に大きい。ただ惜しむべきなのは、彼が発表したブギス語資料はオランダ語による注釈は付けられたものの、たとえば1000頁に及ぶブギス詞華集はすべてロントラ表記だけで提示されていた。そこには、『古人』(Latoa) やソッペン、ラッパン、ボネなどの王国年代記、チョリ・プジエから得た稿本の一部が採録されているが、ブギス語へのアクセス手段を欠く海外の研究者には容易に利用し難い状態に留まったのである。なお、彼が編集した『マカッサル詞華集』(1859年、第2版は1883年)についても同様である。



(Colli Pujie の手書き稿本 ライデン図書館所蔵)

### 【J.C.Jonker ヨンケル (1857-1919)】

東インドネシア、とくにロティ語を専門とする言語学者である。マッテスの帰国後、マッテスに代わるように着任したのはオランダ植民地政府付きの言語行政官であった。稿本収集の多大な貢献者として彼の名をあげておく必要がある。古ジャワ語法典やロティ語の辞書などの業績があるが、南スラウェシに関する著述の有無は明らかでない。彼が収集した稿本の多くはノートに転写された写本であったが、次のケルンが編集したカタログに示された書誌情報からその分量の大きさを確かめることが出来る。

### 【R.A.Kern ケルン (1875-1958)】

ケルンが著した、オランダ及びマカッサルのマッテス研究所（後に南・東南スラウェシ協会に引き継がれる）に現存するイ・ラガリゴの稿本に関する二つのカタログ【Kern 1939, 1954】は、個々の稿本の詳細な要約と登場人物の名前を記したものであり、1080頁からなる前者には、ライデン大学図書館所蔵の78点、ベルリンにあるプロイセン国立図書館19点をはじめとして計100点の稿本が掲載されており、一方、256頁からなる後者には43点の稿本が掲載されている。マカッサルのマッテス研究所の稿本は、オランダ政府の言語行政官であったセンセ（A.A.Cence）が戦前と戦後にかけて収集したものである。所蔵の稿本は後に、南・東南スラウェシ協会へ、さらにインドネシア国立文書館マカッサル分館に引き継がれているが、紛失や経年劣化して判読できないものも多いと聞く。

後に歴史家レオナルド・アンダヤは、恐らくケルンほどイ・ラガリゴ叙事詩を読み込んだ人物はいないと評し、またマックナイトやハモニックは、イ・ラガリゴ叙事詩研究において稿本は入手できず、ケルンによるカタログを手引き書として研究を進めたと述べているように、イ・ラガリゴ叙事詩研究において最重要と言ってよい文献である。なお、時期的には半世紀近く後のことになるが、1989年、この二つのカタログをもとにしたインドネシア語訳がラシデLa Sideらにより試みられ、ガジャマダ大学出版部から刊行された。オランダ語版が海外のプギス研究者によって参照されたように、インドネシア語版はインドネシア人によるイ・ラガリゴ研究においても重要な手引き書になっている<sup>19)</sup>。

### 【A.A. Cence センセ (1901-1977)】

戦前オランダ植民地政府の言語行政官であり、独立まもないインドネシアにおける教育でも功績を残している。南スラウェシにおいて旧オランダ東インドネシア会社の敷地内に1933年マッテス研究所（Matthes Stichting）が開設されたのは、彼がマカッサルに言語行政官として赴任した3年後のことであり、彼の功績によると考えられる。ケルンの項で言及したように、マッテス研究所所蔵のイ・ラガリゴ稿本、ロントラ文



書は、彼に負うものである。センセはマカッサル語・ブギス語研究のみならず歴史学の分野でも業績を残しているが、南スラウェシ研究者にとってもっとも著名な業績は、マッテスが編纂した『マカッサル語・オランダ語辞典』(1874年)以来試みられなかった『マカッサル語・オランダ語辞典』を著したことである。なお、センセの履歴については、『王立言語人類学雑誌』に、『ワジョ国年代記』の博士論文で知られるノーデュイン Noordyn がセンセの追悼文の中で記している。

以上が、主としてオランダ植民地統治期におけるオランダ人研究者によるイ・ラガリゴ叙事詩稿本やロンタラ文書の収集作業である。収集された稿本はライデン大学図書館を中心にいくつかの機関に分散したが、公開されることはなかった。稿本収集の活動はインドネシア独立後になるとしばらく中断する。先にも触れた南スラウェシで勃発したカハール・ムザッカルの反乱におけるダルール・イスラーム軍とインドネシア国軍との対立と戦闘の社会政治的混乱期(1950-65)には、とりわけ村落部で多くの家屋が焼失し、またイ・ラガリゴ叙事詩は反イスラーム的なものと見なされたため、稿本が破棄されたケースも少なくなかったと言われる。当時を知る者は、ダルール・イスラーム軍のいるところでは、「ラガリゴ」や「サウエリ・ガディン」の名を出すことさえ禁じられたと語っている。

混乱期が終息してまもなく、かつての「マッテス研究所」は「南・南東スラウェシ文化協会」となり、南東スラウェシ州が分立した後は、「南スラウェシ文化協会」Yayasan Kebudayaan Sulawesi Selatanと改称され、ガリ版刷りの雑誌“Bingkisan Bunga Rampai Budaya Sulawesi Selatan”が刊行されるようになる。そこには、地元の郷土史研究者が参集し、手持ちのロンタラ文書や収集資料を用いたエッセー、論文が発表された。しかし、新資料はあったにせよ、個人的に所有、保管されるのみで目録化されることはまずなかった。

新しい動きが始まるのは1980年代に入ってからである。1980年、教育文化省からラガリゴ博物館に勤務するようになるムハammad・サリム(後述)は、博物館のプロジェクトとして各地に眠るロンタラ文書を精力的に収集した<sup>20)</sup>。イ・ラガリゴ叙事詩稿本については、稿本のインドネシア語への翻訳が試み始められている。ファファルディンがインドネシア大学文学部に提出した博士論文(1983)では、サウエリ・ガディンが巨樹ウェレンレンゲを切り倒しそれで帆船を仕立ててチナ国を目指すというエピソード<sup>21)</sup>のインドネシア語訳が試みられた。その作業としてまず7つの異本が比較検討され、最終的に、エピソード中の重要な場面をすべて含むチョリ・プジェがマッテスのために書写したNBG188の第7巻が採用されている。ここにNBG188号12巻中の7巻が初めてインドネシア語に翻訳されたことになる。また1987年には、南スラウェシの代表的人類学者マトウラダ Mattulada が議長となって彼が学長を務める中部スラウェシのタドラコ大学で「サウエリ・ガディンに関するフォークロア・セミ

ナー」が開催されている<sup>22)</sup>。さらに1989年には先述したようにケルン【1939、1954】のインドネシア訳がロンタラ研究者レシデLa Sideと彼の死後それを引き継いだサギムンSagumunの名で翻訳出版され、イ・ラガリゴ叙事詩の研究者に大きな刺激を与えた。そして90年代に入ると1995年にNBG188の第1巻が、2000年にはNBG188の第2巻が刊行された。イ・ラガリゴ叙事詩のブギス語（字訳）とインドネシア語訳とを対照させたものであり、研究者のみならず一般読者にもようやく叙事詩の原典と翻訳とが手に届くようになったのである。NBG188の翻訳に従事したのは、すでに博物館を退職していたムハマッド・サリムであり、彼は1985年より始まった南スラウェシ州教育文化省の「ラガリゴ・プロジェクト」に関わった後<sup>23)</sup>、1987年よりインドネシアとオランダ・ライデン大学の共同プロジェクトとして始まった「イ・ラガリゴ叙事詩の字訳・翻訳プロジェクト」(Proyek Transliterasi dan Terjemahan Sure' Galigo yang terpendam di Perpustakaan Leiden)に参画し、5年数ヶ月の歳月を費やしてNBG188の全12巻の翻訳作業に従事した。すでに劣化が著しかった百数十年前の手書き文書をまずローマ字に字訳化し、その後に翻訳作業が続いた。サリムの翻訳に、オランダ側からはブギス文学研究者トールとコールホフが、インドネシア側からは言語学・書誌学のファファルッディン、ヌルハヤティらが編集作業に加わることで、ライデン大学の図書館に永らく眠り続けていたNBG188稿本に光が当てられたのである。

1990年に入ると、注目すべき大規模な稿本・古文書の収集作業、より正確に言うところマイクロフィルム化を目的とするプロジェクトがマカッサルのハサヌッディン大学を中心に始められることになる。同大学文学部歴史学上級講師ムフリス・バエニはフォード財団の助成を受けて、地域に分散し、散逸の瀬戸際にあった古文書類を発掘し、それらを一時的に所有者から借用し、マイクロフィルム化するという作業を進めた<sup>24)</sup>。ムフリスは2003年に刊行された996頁に及ぶ目録集(Katalog Induk Naskah-Naskah Ssulawesi Selatan)の序文に、それまで「聖物」扱いされた古文書の箱を開く前に一羽の鶏を供犠することを余儀なくされたとか、古文書箱を開くと中からは劣化しすでに判読不可能になった文書が出てきたといった苦労話を紹介している。その成果として、5年間にマイクロフィルム化した古文書は4049点に及び、初年度の1992年1095点のうちには、マッテス研究所を引き継いだ旧南スラウェシ文化協会所蔵170点、ラガリゴ博物館所蔵27点を含むものであった。これは従来の収集活動を引き継ぎ、統合すると言う点でも意義があった。全古文書はⅠ.宗教関連、Ⅱ.ロンタラ文書、Ⅲ.文学の3部門に大別され、さらに各部門は14～18に下位分類されている。その中では、祈祷文(Ⅰの部門)、暦、言い伝え(Ⅱの部門)、イ・ラガリゴ(Ⅲの部門)が多くを占め、イ・ラガリゴ関連文書だけで212点に及ぶ<sup>25)</sup>。いずれにせよ、このマイクロフィルム化プロジェクトは埋もれかけていた稿本を発掘し、記録するという意味でこれまでにない成果を上げたと言いうるだろう。

以上、イ・ラガリゴ叙事詩の稿本の収集と保存活動について見てきた。ここで言うのは、稿本の収集活動はムフリスらの古文書保存プロジェクトにより、これまでの収集活動が一段落し、新しい時代に入ったということである。マイクロフィルム・リーダーの不足など、技術・設備上の問題は残るものの、人々は目録を手がかりとして求める文献の概要を知り、マイクロフィルムを通して直接稿本に接することができるようになったからである。現在、これらのマイクロフィルムは、インドネシア国立文書館本館と同マカッサル分館に保管されている。

#### IV 「ラガリゴ」叙事詩の世界化

2000年代に入ると、マカッサルにおいてムフリスらによるマイクロフィルム・プロジェクトが完了するのと期を同じくして、イ・ラガリゴ叙事詩研究が新しい一步を踏み出す出来事があった。ひとつは、イ・ラガリゴ叙事詩を主題とする国際セミナーの開催であり、もうひとつは、アメリカの前衛演劇家ロバート・ウィルソン Robert Wilson によるイ・ラガリゴ叙事詩の演劇化である。

##### 【ラガリゴ国際セミナー】

2002年3月、「ラガリゴ国際セミナー・フェスティバル」が、マカッサルの北方約100キロのバルー県で開催された<sup>26)</sup>。バルー県はチョッリ・プジエの故郷であり、当時の県知事は彼女の直孫であった<sup>27)</sup>。このセミナーを企画したのはハサヌディン大学文学部地域文学所属のヌルハヤティ・ラフマン Nurhayati Rahman であり、バルー県の全面的な協力を得て、国内は言うに及ばず海外からも代表的な南スラウェシ研究者（キャンベル・マックナイト、ロジェ・トール、ジルバール・ハモニック、ホルスト・レープナーなど、なおクリスチアン・ペルラスは紙面参加で論文をハモニックが代読した）が参加し、イ・ラガリゴ研究の現況を知る上でも充実したセミナーになった<sup>28)</sup>。主催者であるヌルハヤティ講師は、書誌学専攻でイ・ラガリゴ叙事詩の翻訳と意味論的分析を行い1998年にインドネシア大学から博士号を取得しており、また2000年にハサヌディン大学から刊行されたNBGI88の第2巻刊行に共同編集者として関わっていた。同時に行われたフェスティバルは、かつてマッテスに稿本NBGI88を提供したテネテ国の王女チョッリ・プジエの出身地パンチャナ村に舞台（バルガ）が設営され、昼間のセミナー後の夜間の部を利用して、3日間にわたり開催された。パンチャナ村では、ブギスやマカッサルの伝統芸能、詩の朗読が行われたが、その中でもっとも注目すべきことは、アメリカの映像作家・劇作家ローダ・グルアー Rhoda Grueur と前衛演劇の演出家ロバート・ウィルソン Robert Wilson 演出によりイ・ラガリゴ叙事詩が劇として初めて披露されたことである。それは、双子として生まれたサウエリ・ガディンが、成長するまで隔てられて暮らしたウェ・テンリアベンをひと目見て恋に陥るものの、彼

女が双子の妹であることを知るに及んで苦しみ、妹の教えに従い彼女と瓜二つのウェ・チュダイをもとめ、巨木からウェレンレンゲ号を仕立てチナ国目指して出帆するまでのエピソードを、ビッス（伝統宗教における両性具有的祭司）であるサイディの語りに導かれながら、無言舞踊劇として演出したものであった。つぎにウィルソン演出の「イ・ラガリゴ」が実現するまでのエピソードを紹介しよう。

### 【「ラガリゴ」叙事詩の演劇化】

グルアーがイ・ラガリゴ叙事詩に関心を抱いたのは、1995年にブギスのビッスに閑するドキュメンタリー制作のために南スラウェシを訪れたのがきっかけだった。その後、バリを拠点に南スラウェシの研究者の意見を聞きながら構想を練り、2000年に演出家ウィルソンに話を持ちかけたと言われる。2002年バルー県の「イ・ラガリゴ」国際フェスティバルでの上演はいわばそのリハーサルであった。グルアーがもっとも苦心したのは、長大な叙事詩のエッセンスを保持しつつ、いかに3時間の劇としてそれを圧縮するかということであったといい、そのためにイ・ラガリゴ研究者としてロジェ・トール、シルチョ・コールホフ、クリスチャン・ペルラス、ジルベール・ハモニックらも協力者として招いたという。

ウィルソン演出による無言劇「イ・ラガリゴ」は、2004年3月のシンガポール、エスペラード劇場での公演を皮切りに、同年5月にはアムステルダム、バルセロナ、マドリッド、6月にはリヨン、ラヴェンナとヨーロッパで巡回公演、2005年7月にはニューヨーク、12月にはジャカルタ（タマン・ミニ・インダ劇場での公演には当時の大統領夫妻も観劇に来ている）、3年後の2008年2月にミラノ、8月に台北、そして最後に2011年4月のマカッサルといったように、計8カ国11の都市で上演された。

舞台に登場する総勢50名の役者はすべてインドネシア人であり、ジャワ人舞踊家レストゥ・イマンサリ・クスマニングルムが52人の舞踊家をジャワ、バリ、南スラウェシから集め、音楽ではバリ人のラヒユ・スパンガが主導的な役割を演じた。もう一人演劇中、ときに語り手としてときにイ・ラガリゴ叙事詩の一節を朗誦し、劇全体の流れを先導するナレーターとして、プアン・マトア・サイディ<sup>29)</sup>が加わった。彼はパンケップ県セゲリにあるビッス・コミュニティの長Puang Matoaであった。彼は南スラウェシで現在でも行われる王国儀礼に他のビッスとともに参加し、ビッスの舞いを披露することでよく知られる。いわばブギスの伝統文化を保守する立場にあるわけだが、彼はウィルソン演出の無言劇にナレーターとして加わったことについてつぎのように述べている。

「「ラガリゴ」が世界の人々に知られることはよい機会です。。。この演劇化は、「ラガリゴ」が世界へはばたく最初の扉なのです」

インドネシアの英文紙「ジャカルタ・ポスト」は、「偉大だが曖昧」という見出しのもとで、感情と意味が欠けているという辛口の批評をウィルソンの演出に与えている。

照明と役者の動作が特徴と言われるウィルソンの演出に対してそうした批判はある程度あてはまるかも知れない。しかし、マカッサルでの最終公演は、「イ・ラガリゴ公演は各地を放浪していた息子がようやく故郷に帰還したといった雰囲気迎えられた」（コンパス紙2011年5月8日付け）ようである。公演では全11幕中の一部を割愛して上演されたというのが公演初日はジャーナリストのほか、恵まれない子どもが無料で招待されたという。海外はおろかインドネシアでも、南スラウェシをのぞけば一部の人以上しかその名前を知らなかったこのラガリゴ劇を人々が好意的に受け止めたのは、先のサイディの言葉に要約されるだろう<sup>30)</sup>。一方、海外における公演劇評では、ウィルソンの照明効果に基づく前衛的な手法と「古代的」な叙事詩とが違和感なく、むしろ効果的に結びついていることが高く評価されていたこと、また観客からはサウエリ・ガディンよりもウェ・チュダイに対する関心が高かったという批評があったことを付け加えておく<sup>31)</sup>。

### 【イ・ラガリゴ叙事詩、世界記憶遺産になる】

2009年にイ・ラガリゴ叙事詩を世界記憶遺産登録に申請したのは、マカッサルで古文書のマイクロフィルム化プロジェクトを組織したムフリス・パエニとオランダ王立言語・人類学研究所（KITLV）でブギス文学、書誌学を研究するロジェ・トールである。ムフリスはプロジェクト終了後、ジャカルタにある国立文書館館長に抜擢され、一方ロジェ・トールはジャカルタに設置されているKITLVの所長として赴任していた。ユネスコの世界記憶遺産プログラムにインドネシアは2005年から参加し、2008年にはマジャパヒト王国の年代記『ナガラクルタアガマ』が世界記憶遺産に登録されていた。

ムフリスとトールが代表となり、ユネスコに世界記憶遺産として申請したのは、インドネシア、マカッサルのラガリゴ博物館とオランダのライデン大学図書館に所蔵される2種類の手稿である。申請書によれば、前者は217頁からなり、サウエリ・ガディンとその息子ラガリゴがシンリジャワ（Senrijawa）へ向かう旅を描く一つのエピソードを描いたもので、19世紀初頭に書かれたとされる。後者はフォリオ紙2851頁12巻よりなり、イ・ラガリゴ叙事詩の稿本中もっとも長大なもので、叙事詩全体の最初の3分の1をなすといわれる。申請書には、この手稿NBG188が、マッテスの依頼によりパンチャナの王女チョッリ・ブジエによって19世紀中頃に書かれたものであること、この手稿は、ムハムマッド・サリム氏によりブギス文字からラテン文字への転写、さらにインドネシア語訳が行われており、その最初の二巻分はすでに出版されているなどの経緯が記された。この2種類の稿本がインドネシアとオランダ共同で、申請されたのである。

インドネシア・ユネスコ委員会での説明会の席上、ムフリスは「世界はすでに「ラ・ガリゴ」について知っています。しかし、我々が心配するのは、この文化遺産を保存して行くことを、南スラウェシのみならずインドネシアの人々にどのように自覚させ



るかということです」と語り、また、そこに同席したインドネシア国内ユネスコ委員であるアサフ・ラフマン氏は「この文化遺産は、私たちが共通に持つものです。それゆえ、それを守り、保存するには、政治的な支持と、その他あらゆる方面からの支持が必要です」と補足した<sup>32)</sup>。

ムフリスは、先のマイクロフィルム化プロジェクトを通じて、古文書が時に廃棄されるなど古文書に対する認識の欠如、あるいは湿気・黴、紙質の劣化など古文書を解読する以前の管理上の問題、そして古文書の解読作業を進めるための教育上の問題など、文化遺産保護に伴って生じうる具体的な課題を認識していた<sup>33)</sup>。一方、ロジェ・トールは、「イ・ラガリゴ叙事詩に特徴的なのはたんにその長大さだけではなく、使用される言語、韻律の美しさである」と文学的観点からイ・ラガリゴ叙事詩に対する見解を述べた模様である。

結局、2年間にわたる審査期間を経て、2011年2月、つまりマカッサルでウィルソンの公演が行われるふた月前に登録の通知があり<sup>34)</sup>、翌年2012年4月に世界記憶遺産の認定証が発行された<sup>35)</sup>。なおこの、イ・ラガリゴ叙事詩手稿と同時期に申請された『ババッド・ディボネゴロあるいはディボネゴロ王子の自伝的編年史 [1785-1855]』(Babad Diponegoro or Autobiographical Chronicle of Prince Diponegoro) は2013年に登録認定された。

2013年9月8日付のインターネット版『テンボ』誌は、「一つの文書の長き道」(Jalan Panjang sebuah Naskah) というタイトルでイ・ラガリゴ叙事詩を取り上げている。ウィルソンによる演劇化とユネスコの世界記憶遺産がおもなトピックだが、記事の縦糸になっているのは、すでに本稿でも取り上げたムハマッド・サリムという人物である。幼い頃より父親がイ・ラガリゴ叙事詩の一節を朗誦するのを聴きながら育ち、プサントレン(イスラーム塾)で教育を受け、高等教育を受けないまま、地元の教育文化省の役人になる。その間、つねにロンタラ文書を読むことに親しみ、在野のロンタラ学者として徐々に頭角を現すようになる。そして定年後は、イ・ラガリゴ叙事詩12巻の訳業を達成し、またウィルソンの演劇化に際しても台本を作成したグルワーに10日間朝から晩までイ・ラガリゴ叙事詩のレッスンをしたという。以上の記事から窺えるのは、サリムが、イ・ラガリゴ叙事詩の国際化という文脈の中に常にいたことである。言い換えれば、彼の情熱と献身的な努力なしには、イ・ラガリゴ叙事詩の国際化は達成されなかったといえるだろう。

## V 反響——世界遺産認定以後

2011年には、イ・ラガリゴ叙事詩の世界記憶遺産登録と国際的演劇家によるイ・ラガリゴ叙事詩の公演が同時に南スラウェシにとどいた年である。そうした出来事に対して、南スラウェシの社会は、あるいは人々はどうのように反応したのだろうか。

まず大学関連では、上にあげたヌルハヤティ・ラフマン女史が中心となり、いくつかのセミナーが開催されている。12月には「サウェリ・ガディンの記憶、ブギスの記憶」（インドネシア中央研究院の重鎮タウフィック・アブドゥラーの講演）、2012年4月には「イ・ラガリゴ国際セミナー」がいずれもハナスディン大学で主催されている。後者には、ロジェ・トール、シルチョ・コールホフ、ムフリス・パエニら国際記憶遺産に関わった人物が参加している。これにつづき、北ルウ県主催で「ラガリゴ・フェスティバル」が開催され、コールホフが「文化の鏡としてのラガリゴ」と題して講演している。また、マカッサル出身の若い作家が中心となって毎年開催される「マカッサル作家フェスティバル」では、2011年6月、同グループメンバーが制作したドキュメンタリー映画「ムハマッド・サリムに捧げる」を上映、さらにイ・ラガリゴ叙事詩を再解釈した詩の朗読会が行われている。これに加えて、イ・ラガリゴ叙事詩の小説化を試みる者も現れるようになり、以前から「ラガリゴ」叙事詩の小説化を試みていたイドワール・アンワール『ラガリゴ 最初の人間の降臨』（2006年初版、2015年再版）、『ラガリゴ トンポティッカの真珠』（2006年）、『ラガリゴ 黄金の双生児の誕生』（2014年）を筆頭に、ヌンディン・ラムらによる『イ・ラガリゴ』（6巻本）、ドゥル・アブドゥル・ラフマン『ラガリゴ』（2011年、2012年）、さらにヌンディン・ラム『ドラマ サウェリ・ガディンとウェ・チュダイ』（2011年）などが地元出版社から刊行されている<sup>36)</sup>。もうひとつ注目すべきなのは、学生グループを中心としたイ・ラガリゴ叙事詩の演劇化の試みである。2014年9月にはハサヌッディン大学学生約100人により、「人間性、世界平和、文化的価値」をテーマとする「ラガリゴ」公演が開かれた。上演時間8時間及ぶ長大なものであったといわれる。演劇化の試みは、ハサヌッディン大学の一グループに留まらない。ジャカルタでは、マレーシアに居住するブギス移民の子孫たちが「私の名はラ・ガリゴ」を公演している。

以上、2011年前後から始まるイ・ラガリゴ叙事詩をめぐる動きを列举してみた。そうした動向は今後も継続すると考えられるため、ここで結論めいたことを言うのはまだ早計であろう。ただし、上に列举した事柄から感じとれるのは、人々がイ・ラガリゴ叙事詩の小説化や演劇化を試みるものの、必ずしもユニークであるとはいえず、何を目指そうとしているのかなかなか見えないことである。自らが忘れかけていた、あるいはほとんど必要としなくなっていた自文化の一部に突然、外部からの照明が当てられたことで、喜び、戸惑い、それでも何かしたいと試してみる、そうした模索的状况にあるのが現段階であるといえようか。

## VI まとめ——自文化への対し方

ローカルな文化が他者（異文化）の視線に晒されることで、新たな意味を付与され、

より広い文化的脈絡での位置を獲得するという事例はそれほど珍しいことではない。観光というのは、おおよそそうした視線のずれ、文脈の置き換えによって成り立っているといえる。イ・ラガリゴ叙事詩における外国人研究者による再発見の道のりも同様の力学により、その価値が見出されたといってもよいだろう。しかし、同時に他の文化的産物と大きく異なるのは、それが特殊な言語的構築物であるがゆえに、他の文化的産物をもつような移動性、可塑性をもたないことである。ブギスの人々は、イ・ラガリゴ叙事詩が世界記憶遺産として認められたが故に、いまやそれは「世界文学」だとしばしば豪語するが、そういった途端に、袋小路に陥ることになりかねない。なぜならば、「本物」のイ・ラガリゴ叙事詩は未だ手に届かないところにあり、またたとえ手に届いたとしても古ブギス語で書かれた韻文は誰もが理解できる代物ではない。南スラウェシでイ・ラガリゴ叙事詩を読めるのはせいぜい100人足らずであろうとも言われる。そして十分な読者を持ち得ない「世界文学」というのは、論理矛盾になるからである。

だとすれば、そうした袋小路から抜け出すにはどのような方法が考えられるのだろうか。ここで参考になるのは、ウィルソンが試みた演劇化という手法であろう。傑出した前衛演出家であるウィルソンの手法をまねるということではなく、彼が演劇化を通じて示したように、イ・ラガリゴ叙事詩がもつ価値を文字言語だけに依存することなく別の表現形式に変換するような方法を模索することである。その場合、音声表現として叙事詩を捉え直すことが重要であろう。元来、イ・ラガリゴ叙事詩は、口頭伝承に基づいていたはずである。しかし人々はその音声性を忘れかけている。むしろ、イ・ラガリゴ叙事詩を文字言語というより、音声言語表現として見るのが、叙事詩がかつて有していた律動性とパフォーマンスを回復し、何らかの新しい価値を再発見する可能性があるかもしれないからである<sup>37)</sup>。

## 謝辞

本稿は科学研究費補助金基盤研究C「宗教と慣習のダイナミクスーラガリゴ叙事詩の世界遺産化と地域文化の創造」の助成を得て実現したものである。ここに記して謝意を申し上げます。

## 注

- 1) 「黒猫の物語」は、自分の忠実な従者である黒猫が住民によりいじめられるのに怒り、稲の女神サハンヤン・スリが安住の地を求めて村から村へと回る物語である。冒頭部分に、バタラ・グルの娘が生後7日後死ぬとしばらくして埋葬した場所一面に稲穂が育っていたというエピソードがある。筆者に「黒猫の物語」を見せてくれた婦人は、かつて来たスラウェシのトリトリに一時的に移住した際にこの「黒猫の物語」持参したと語った。
- 2) 同時に、なぜ忘れられかけたのかという問いも生じうるかもしれない。しかし、その一方で、後述するように1990年代初頭に行われた古文書収集作業で、少なくとも数百のオーダーに達するイ・ラガリゴ叙事詩

の稿本が見出されたという事実である。

- 3) この二分法を最初に提唱したのはペルラス [Pelras 1975] である。
- 4) 大要を作成するにあたり、Pelras [1975]、Kern [1989]、Koolhof [xxxx] を参照にした。
- 5) 筆者が別稿で紹介したA・ザイナル・アビディンによる要約では、ウェレンレンゲ号の沈没で物語は終わっている。
- 6) Kern [1989] Bab 1. Pengantar ke I La Galigo (第一章 イ・ラガリゴ叙事詩案内) 参照。
- 7) これらの王国は、その発端は神話的要素が強いものの、建国から後代の王に至る系譜を含む歴史記述をもち、その多くはインドネシア独立まで継続する。そうした諸王国が支配した時代を、日常的な会話のなかで人々は「ブギス時代」と呼び、それ以前の「ラガリゴ」時代、それ以降の「オランダ時代」と区別するのが一般的である。
- 8) たとえば、マトゥラダは時代について、ラガリゴ時代、ブギス王国時代、オランダ時代、日本時代、現代インドネシアという区分を設定している。一方、アンディ・ザイナル・アビディン [Andi Zainal 1971] は、サウェリ・ガディンに関する伝承がブギスにとどまらず、周辺地域まで及ぶことに注目し、比較的視点を導入しつつ、イ・ラガリゴ叙事詩を史的指摘資料として扱う可能性を探っている。
- 9) Pelras, Christian [1996] の The Bugis. Blackweli. これ以外に32点の論文を所収した重要な論文集として、Pelras, Ch. 2010. Explorations dans l'univers des Bugis: Un choix de trente-trois rencontres. Paris: Cahier d'Archipel 39.がある。
- 10) イ・ラガリゴ叙事詩は、元来口承伝承により伝えられたと考えられるが、18世紀頃より、ロントラ文字に字訳化、写本化することが現地の人々—その多くは高位の貴族女性—によって試みられていた。
- 11) カハール・ムザッカルの反乱に端を発するダルルール・イスラーム軍と国軍の戦闘は、ダルルール・イスラーム側の投降により南スラウェシの主要部では、ほぼ1960年には終息するが、南スラウェシと東南スラウェシの辺境部では戦闘が継続し、カハール・ムザッカルがシリワンギ軍団により銃殺される1964年まで継続した。
- 12) Cambell Macknight 1988参照。なおPelras [1996] は”Leyden (1807)”と著書の中で言及しているが書誌情報は掲載されていない。原典については筆者も未確認だが、ここでは原典を引用しているマックナイトによる書誌情報を採用する。
- 13) 上記Macknight [1988] によれば、ラッフルズによるラガリゴ作者説は、その論拠を示しておらず、また彼以外にはそうした主張は見出されないと指摘している。そもそもラッフルズ説のように、イ・ラガリゴ叙事詩という神話的叙述の登場人物を實在の作者とする以前に、イ・ラガリゴ叙事詩自体の歴史的資料としての価値をまず問う必要がある。
- 14) Narrative of Events vol. I . chapter XII 参照。
- 15) Koolhof氏との私信によれば、聖書のブギス語翻訳はほとんど生かされなかったという。なお、筆者は1980年代マカッサルにある高等神学校 (Sekolah Tinngi Theologi) を訪れた際、図書室の書庫に色彩鮮やかな装丁を施したブギス語や聖書が山積みされていたのを覚えている。
- 16) 彼は当時のボネの女王バッセ・カジュアワに謁見することを申し出たが拒絶されている。
- 17) Kernによれば、この12巻に及ぶ稿本は、イ・ラガリゴ叙事詩全体のおよそ3分の1に相当すると述べている。
- 18) 2016年11月現在、インドネシア語訳は全12巻中の2巻までが公刊されているに過ぎない。ただし、故Muhammad Salim氏により全12巻のローマ字への字訳、インドネシア語訳は終了しており、後は編集作業が残されている。
- 19) ただし、1046頁からなるインドネシア語訳は、オランダ語原典をもとに38の稿本を選択したものであるが、オランダ語原典とインドネシア語版に採録された稿本の対照表が付されておらず、書誌学的には不備なものになっている。
- 20) 南スラウェシ州立ラガリゴ博物館による収集活動が1980年より始まり、後にオランダでイ・ラガリゴ叙事詩の翻訳に従事するムハammad・サリムがこれに参画した。収集成果は未詳であるが、2011年の世界記憶遺産として登録されたイ・ラガリゴの稿本はこの収集成果によると考えられる。
- 21) ファファルディンの博論題目にあるように「ウェレンレンゲ樹倒される」(Ritumpanna Welenrennge) とい

うエピソードである。この大きなウェレンレンゲ樹にはたくさんの鳥の巣があり、倒れるとともにそこにあった鳥の卵で河は黄色く染まり、その水を浴びたために河口で暮らしていたバジャウ人は毛髪が黄色くなったという伝承がある。なお、この河は、現代のルウ県東部にあるチェレカン河であると信じられている。

- 22) 1990年にその成果がインドネシア教育文化省から公刊される。ムハマッド・サリムによれば、参加者はその時点では未定稿であったKern (19391954) のインドネシア語訳を事前に読み、発表原稿を用意したという。
- 23) このプロジェクトでは、マカッサルの伝統的語り芸やトラジャの口頭伝承のインドネシア語訳が試みられたが、イ・ラガリゴ叙事詩については短い稿本の翻訳しか出ていない。
- 24) その当時、ムフリス氏の研究室があった大学構内の「沿岸民研究センター」を訪ねると必ずと言っていいほど古文書をマイクロフィルム化する作業の音が聞こえたものである。
- 25) 2013年に同カタログをもとに、ラガリゴ稿本だけの目録集が新たに編まれているがそれによると稿本点数は300に及んでいる。Katalog Galigo: Koleksi Badan Perpustakaan dan Arsip Daerah, Propinsi Sulawesi Selatan Tahun 2012.
- 26) このセミナー及びフェスティバルについては伊藤 [2002] を参照。
- 27) このセミナーをきっかけに、2008年、チョッリ・ブジエを国民英雄にする動きがあった。先のヌルハヤティ・ラフマンが中心となり、「チョッリ・ブジエは南スラウェシのカルティニに匹敵する」として、彼女を国民英雄に推薦するため、南スラウェシでセミナーが開催され、チョッリ・ブジエに関わる書物も刊行されたが、実らなかった。
- 28) セミナーの成果は次の書として刊行された。La Galigo: Menelusuri Jejak Warisan Sastra Dunia by Nurhayati Rahman (Editor), La Galigo Press.
- 29) 彼は以後、ヨーロッパなど世界各地の公演でナレーター役を演じた。2011年のマカッサルでの最終公演の後体調を崩し、同月5日には亡くなった。彼の計報は地元の地方紙ばかりか全国紙「コンパス」、週刊誌『テンボ』でも伝えられた。なお、イ・ラガリゴ叙事詩の翻訳に尽力したムハマッド・サリム氏は、マカッサル公演を楽しみにしていたが、2011年の3月になくなっている。
- 30) 世界にも知られるようになったこのサイディの文化活動は、それ以前のビッスには見られなかったものである。彼はマカッサルの公演から数週間後、体調を崩して亡くなった。
- 31) イ・ラガリゴ叙事詩の中で、ウェ・チュダイは気性の激しい個性的な人物として描かれている。なお、南スラウェシにおけるトランスジェンダーの研究で知られるシャリン・グラハムも「ラガリゴ」公演について最近の論文で論じているが、残念なことに本論文執筆時には参照できなかった。
- 32) 14 DESEMBER 2010 tempointeraktif.com "UNESCO Kaji Naskah I La Galigo Jadi Warisan Dunia" (最終閲覧日: 2016年12月1日)。
- 33) Mukhlis, Dkk [2003] 参照。
- 34) 25/02/2011 "UNESCO Akui I La Galigo Warisan Dunia" (最終閲覧日: 2016年12月1日)。
- 35) 27 April 2012 Antara "La Galigo Terima Sertifikat MoW UNESCO" (最終閲覧日: 2016年12月1日)。
- 36) 題材としてサウエリ・ガディンとウェ・チュダイが選ばれるのは、これまで博士論文で稿本の翻訳を試みたファファルディン、ヌルハヤティにも共通している。イ・ラガリゴ叙事詩の中で、もっとも物語的要素が強く、人物描写も豊かなためであろう。
- 37) Pelras [2016] 参照。

## 参考文献

David Bulbeck and Ian Caldwell

2000 LAND OF IRON. The Historical Archaeology of Luwu' and The Cenrana Valley. Centre for Southeast Asian Studies, The University of Hull and School of Archaeology and Anthropology, Australian National University



- Fachruddin Ambo Enre,  
 1983 Ritumpanna Welenrennge: Telaah Filologis Sebuah Episode Sastra Bugis Klasik Disertasi. Jakarta: Universitas Indonesia.  
 1999 Ritumpanna Welenrennge: sebuah episode sastra Bugis klasik Galigo, Yayasan Obor Indonesia, Jakarta.
- 伊藤 真  
 2002 「インドネシア地方分権化時代における民際セミナー－「ラ・ガリゴ」国際セミナー及びフェスティバルに参加して－」日本オセアニア学会NEWSLETTER No.74:10-16.
- Kern, R. A.  
 1939 Catalogus van de Boegineesche tot de I La Galigocyclus Behoorende Handschriften der Leidsche Universiteitsbibliotheek. Leiden: Universiteitsbibliotheek.
- Koolhof, Sirtjo  
 1992 Dutana Sawerigading: Een Scene uit de I La Galigo. Skripsi, Universitas Leiden.  
 1995 Pengantar dalam La Galigo Jilid I. Jakarta: Djambatan.
- Mattulada dkk,  
 1990 Sawérigading, Dirjen Kebudayaan Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Matthes, B. F.  
 1872 Boeginesche Chrestomathie, 3 vols. Amsterdam.
- Mukhlis PaEni, DKK  
 2003 Katalog Induk Naskah-Naskah Sulawesi Selatan, Arsip Nasional Republik Indonesia kerjasama The Ford Foundation, Universitas Hasanuddin, Gadjamada Universitas Press.
- N.B.G. No. 188  
 (n.d.) Nederlandsch Bijbel no. Perpustakaan 188 jilid i sampai 12, milik Perpustakaan di Leiden, Belanda (Karya Arung Pancana Toa yang diberikan kepada Dr. B. F. Matthes).
- Nunding Ram (ed.), Andi Wanua Tanke, anwar Nasyaruddin  
 2011 Drama Sawerigading dan We Cudai, Makassar: Refleksi.
- Nurhayati Rahman  
 1998 Pelayaran Sawérigading ke Tanah Cina: Analisis Filologi dan Semiotik La Galigo. Jakarta: Universitas Indonesia.  
 2006 Cinta, Laut dan Kekuasaan. DLM Karya La Galigo. Makassar: La Galigo Press.
- Nurhayati Rahman (ed.)  
 2003 La Galigo: Menelusuri Jejak Warisan Sastra Dunia, Makassar: La Galigo Press.
- Pelras, Christian  
 1975 Introduction à literature Bugis, Archipel 10:  
 1996 The Bugis. Blackwell.  
 2010 Explorations dans l'univers des Bugis: un choix de trente-trois rencontres. Paris: Cahier d'Archipel 39.  
 2016 "Orality and writing among the Bugis," IJAP, vol.12, Supp.1.13-51.
- Salim, M. et al  
 1995 I La Galigo menurut naskah NBG 188 yang disusun oleh Arung Pancana Toa, vol. 1. Jakarta: Djambatan dan KITLV.  
 2000 La Galigo menurut naskah NBG 188 yang disusun oleh Arung Pancana Toa, vol. 2. Makassar: Lembaga Penerbitan Universitas Hasanuddin
- Tol, Roger.  
 1987 The Heroic Fall of Bone, 1905: the Toloq Rumpaqla Bone by Arung Manajeng. Paper Presented to the Second International Workshop on Indonesian Studies, Leiden, 2 – 6 November 1987.  
 1990 Een Haan in Oorlog: Toloqla Arung La Buaja: Een Twintigste-eeuws Buginess Heldendicht van de hand van I Mallaq Daeng Mabela Arng manajeng. Dordrecht/Providence: Foris.